

# 新年にあたって

日高農業改良普及センター所長 松井克行



新年あけましておめでとうございます。

組合員の皆様には、新たな気持ちで輝かしい初春をお迎えのことと存じます。

また、皆様には平素から普及センターの活動全般にわたり深いご理解と温かいご支援を賜り、心から感謝を申し上げます。

昨年を振り返りますと、2月5日から6日にはこれまでに無い記録的な大雪により、多くのビニールハウスが倒壊する大きな被害を受けました。その後、3月8から9日には大雨と融雪水による施設への浸水被害、9月4～5日には台風21号の影響によりハウス施設への被害、そして、9月6日には北海道胆振東部地震に伴う停電により搾乳作業等へ支障と、自然災害による大きな影響を受ける1年で

ありました。

改めまして被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。

農耕期間の気象経過を振り返りますと、月ごとの積算温度は、8月を除いて平年並からやや高い値となりましたが、月の中の寒暖差が大きくなりました。日照時間は、平年に比べ少なく経過し、特に6月2半旬から7月4半旬は平年対比69%と平年を大きく下回りました。降水量は、9月で平年より少なかつたものの各月では平年並みから多く経過し、特に6月2半旬から7月3半旬までの間は断続的な降雨がありました。総じて、昨年の気象は、気温変化が激しく、日照時間の少なさと、断続的な降雨が各作物に大きな影響を与えた年といえます。

一方作柄は、これらの気象や自然災害の影響で平年を下回る作物が多く見られました。しかし、組合員皆様の高い営農技術と適切な栽培管理の下、その影響は最小限にとどまったものと思います。

品目別に見ますと、水稲は移植作業は平年並に終了したものの、6月中旬からの低温・寡照の影響で生育は遅れ、茎数も平年を下回りました。出穂期は平年より3日

遅く、その後も低温・寡照により登熟が緩慢で、成熟期は平年より5日遅れ、収穫作業も1週間程度遅くなりました。収量は、一穂粒数が多く稔実粒数も多かったものの、登熟歩合が平年より低かったことから、作況指数は94と9年ぶりの不良となりました。

園芸の主力作物であるミニトマトにつきましては、大雪による被災の中、地域全体が協力団結し復旧にご尽力なされ、最小限の影響で作付けが開始されました。水稲同様春先から夏にかけての低温・寡照の影響を受け、生育が遅れるなど、栽培管理の難しい年となり、年間を通じての出荷数量は前年を下回りました。しかし、販売金額では単価高もあり、前年に引き続き9億円台を維持する結果となりました。

肉牛につきましては、黒毛和種牛素牛の出荷頭数は前年並みとなりました。一頭当たり平均価格は、雄雌ともに前年をやや下回る結果となりましたが、依然として堅調に推移しています。

軽種馬においては、北海道市場で売却総額が112億円と、過去最高額を記録した2017年に次ぐ結果となりました。さらにホッカイドウ競馬におきましても、馬券販売額が251億円と8年連続で前年を上回っており、インターネット販売が依然として好調であ

り結果につながっています。

牧草は、収穫時期の断続的な降雨の影響で収穫作業が遅れ、収穫作業最盛期は1番草で平年より15日遅れ、2番草収穫作業最盛期も平年より11日遅れました。適期に収穫ができなかった牧草は、栄養価や嗜好性が低下するため、飼料分析の実施と対応策が必要となります。

農業を取り巻く情勢につきましては、TPP11が昨年12月30日に発効となるなど、国際環境が新たな局面を迎え、農業・農村をめぐる情勢は大きく変化し、先行きが不透明な状況にあります。

このような状況下、政策に応じた長期的な戦略を検討することが必要ですが、「今すべきこと」、「今できること」を今一度見つめ直し、一歩ずつ確実に実行していくことが重要と考えます。

日高地域の優位性や潜在力を最大限に活用し、ゆとりある農業経営が永続できるよう、普及センターとしても「共に考えていく活動」を進めてまいりますので、皆様の一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年が皆様にとりまして健康で希望に満ちた良き年となり、また、豊穰の年となりますことを心よりご祈念申し上げます。年頭のご挨拶といたします。